

『もりおかの短歌』冬の部

〈一般部門〉 優秀賞十首

にどな

二度泣きの

おも

はしわた

思いがけなく橋渡る

さち

ちか

ふゆ

こずかた

幸は近しと冬の不来方

大阪府吹田市 富永 武司

みずか

自らの

よわ

こどく

かく

弱さ孤独を隠さずに

うた

たくぼくわれ

はげ

歌う啄木我を励ます

秋田県湯沢市 佐井 良子

かんぱき

つも

ゆき

かた

寒波来て積りし雪は固けれど

ゆき

「雪あかり」の灯

こころ

と

心も解かす

盛岡市 堀米 公子

としあ
年明けて

し あさ つえ
凍ばれる朝に杖ついて

かよ だ みこ だ いち
通い出したり神子田の朝市に

盛岡市 赤坂 昌信

きたぐに かぜ ふ おか た
北国の風吹く丘に立つひとり

いわて あい
岩手愛し

ち す
この地に住む

愛知県大府市 大嶺 さつき

ぎぼ う し ゆ よ あし こ し や す
擬宝珠に寄りて足腰休みつつ

はんせい じ だい
藩政時代へ

おも
思いめぐらす

盛岡市 餘目 忠吉

と ひら
戸が開き

かぜ は だ ふ
みちのくの風肌に触れ

ふゆ きび われ なら
冬の厳しさ我習ふ

東京都板橋区 西下 歩

戦争に供出されし銅像の

台座を照らす

荒城の三日月

花巻市 千田 正平

コンサート会場を出て

盛岡の銀杏も

ワルツを踊る黄昏

秋田県大仙市 鈴木 仁

寒に入り

「サムガンスナツス」と挨拶の

言葉を聞けば心暖まる

盛岡市 小林 貴史

『もりおかの短歌』冬の部

〈ジュニア部門〉 優秀賞

(応募時、中学生以下に限る)

該当なし

【講評】

盛岡の冬から春に向かう季節は贅沢な悩みがつきまとう。何故なら遠い春を待ちわび冬の寒さを嫌いながらも「サムガンスナツス」と言って冬を噛みしめたり、北風や凍てつく雪に心動かされたり：結局は冬と春のどちらの季節に身を委ねるべきか考えあぐねてしまう。

また転勤族の人は、早く帰任したい寂しさがいつの間にか離れがたい寂しさに変わり、明日への一步を踏み出すしばしの間、開運橋で北上川を眺めながら心は行きつ戻りつ。そして物好きな人、いや風流な人は冬枯れの殺風景な不來方城址を見ては南部藩時代を行ったり来たり：そう、それぞれに冬の盛岡を存分に楽しんでいるのだ。

こうして季節を敏感に感じながら、この贅沢な悩みを歌に託した十首を是非、紹介したい。

令和七年三月選 冬の部

投稿数 八十一首

選者 山本 玲子